

## 論文の要旨

論文題目 日台接触場面の湾人上級日本語台学習者の依頼会話に関する研究  
日本人・台湾人両母語場面と比較して

氏名 徐 孟鈴

学位 博士(文学)

授与年月日 平成20年11月28日

### 研究目的

本研究の目的は、日本語母語場面(以下J Jとする)、台湾人母語場面(以下T Tとする)、日台接触場面(以下TJL Jとする)における依頼会話を比較、分析し、その共通点と相違点を明らかにすることにある。特に、J JとTJL Jを比較することにより、上級の台湾人日本語学習者(以下TJLとする)のTJLの依頼会話に見られる特徴を究明する。さらに、T TとTJL Jの依頼会話における類似性を検討することにより、TJLの日本語に母語の影響が見られるかどうかを探ることも本研究の目的である。

### 調査概要

調査方法は20代から30代前半までの被験者を対象としたロールプレイである。ロールプレイは同性同士で行い、ロールプレイの相手は親しい友人に頼むように手配した。被依頼者にとって負担度の大きい依頼を行う状況設定である。日本人(以下Jとする)、台湾人の母語場面の録音データは日本及び台湾で収集した。接触場面の調査は日本で行った。被験者のTJLは全員日本語能力試験一級に合格している。なお、調査時では、日本で生活しており、日本語で授業をうけ、論文を書いている。

上記の手順でJ J37組、T T39組、TJL J36組の録音データ、合計112組のデータを収集した。収集した資料を日台母語話者それぞれ2人に聞いてもらい、依頼会話として不自然、または今回の場面設定と食い違いがあると判断されたデータは分析対象から除外した。最終的に、J J、T TとTJL Jの3つの場面で、それぞれ30組(男性30人、女性30人)、計90組(男性90人、女性90人、合計180人)、1組5分程度で、合計約450分の録音データを分析の対象とした。

### 研究の枠組みと分析単位

日本語接触場面でTJLが依頼という目的を達成するために、どのように会話を始め、依頼を明言し、依頼を断られた後でどのように依頼を継続し、最終的にどのようにして依頼会話を終わらせるかをすべて分析対象とする。そのような研究目的にあわせて、依頼会

話を【先行部】、【依頼部】、【再依頼部】、【終結部】に分けて分析する。そして、「意味公式」という分析単位を設定して、それぞれの【部】に現れる「意味公式」を使用人数、使用頻度、表現形式、配列順序と談話構成の観点から分析し、考察を行った。

本論の中心は第5章から第8章までである。第5章では【先行部】、第6章では【依頼部】、第7章では【再依頼部】、第8章では【終結部】について分析と考察を行った。最終章の第9章では、各章ごとの結論をまとめるとともに、【先行部】、【依頼部】、【再依頼部】、【終結部】を1つにまとめて、依頼会話全体を包括的に捉えてまとめた。

## 主な分析結果と考察

### 1. 依頼会話全体の特徴

3場面に見られる依頼会話の共通的な特徴は、【先行部】が一番長く、その次が【終結部】であり、【依頼部】は比較的短いことである。

難しい依頼を行う会話では、【先行部】で会話参加者間のやり取りが長く、依頼側はできるだけ「依頼の明言」を先に延ばそうとしている。【終結部】が長いのは、依頼側と被依頼側がお互いの関係の修復に気を配っていることの表れだと考えられる。

3場面に見られるそれぞれの依頼会話の特徴は下記のようにまとめられる。

### 2. 母語場面の日本人の特徴

- 1) 全体的に「意味公式」の使用数が他の2場面より多い。
- 2) 【先行部】における「相手の状況」の使用、【先行部】と【依頼部】における「配慮発話」の使用の割合が高く、3場面で一番多い。
- 3) 「意味公式」に相手の同意や共感を求める「ね、よね」、断定を避ける「～んだけど」のような文末表現が多い。
- 4) 依頼の表現形式に「～してほしい」を使う人が8割近くいる。
- 5) 「相槌的発話」が3場面で一番多い。
- 6) 【再依頼部】では、相手の断りに対して必ず「受け止め」を出す。8割弱のJが「同意共感」の「受け止め」を使用している。
- 7) {懇願型}と{負担軽減型}の再依頼のストラテジーの使用が一番多い。
- 8) 【終結部】の「意味公式」の使用数、及び話者交代の回数は3場面で一番多い。
- 9) 「終結開始の表現」として、「約束の内容や次の行動に言及する」を使う傾向がはっきりしている。【終結部】に「感謝と詫び」を補償のストラテジーとして用いる。

JのJの会話は相手に対する恐縮の意、申し訳なさを表す「言いよどみ」、「配慮発話」、「詫び」を用いることによって、最後まで対話相手の親友に控えめな態度をとっていることが分かった。Jは依頼の会話の最初から、話題と相手の関連性について言及をして、常に相手に確認を求め、相手の共感を得ながら共通した基盤を作り上げていく展開をしている。会話の最後に「約束の内容や次回の約束について繰り返し」、念を押してから、別れるように

している。

J J の会話は、別れ際まで相手の反応を伺いながら常に確認をし、特に新しい情報がなくても徐々に発話権を渡しあって会話を協働的に終わらせ、最後の最後まで相手に配慮をしている特徴が見られた。

### 3. 母語場面の台湾人の特徴

- 1) 【先行部】における「相手の状況」の使用が少ない。「苦境の説明」を行うとき依頼を正当化するような理由が多い。
- 2) 【先行部】と【依頼部】における「配慮発話」の使用が少ない。
- 3) 「冗談」の使用率が高い。被依頼側に名前または綽名で呼びかけることが多い。
- 4) 中国語では「言い切り」の文末表現が一般的である。
- 5) 「相槌的発話」が3場面が一番少ない。
- 6) 「依頼の明言」の表現形式に、「可不可以 / 能不能～」のような反復疑問形式の可能表現が一番多く、その次に「我想～」のような願望表現が多い。
- 7) 【再依頼部】では、相手の断りに対する「受け止め」を出した人は4割程度であり、場面で一番少ない。そのうち、6割の人が「了解」の「受け止め」を使用している。
- 8) 【再依頼部】で、{質問型}と{承諾強要型}のストラテジー使用が特徴的である。
- 9) 【終結部】における「意味公式」の使用数と話者交代の回数はJ J に比べると少ない。  
【終結部】では「見返りの言及」、「将来の接触への言及」を使う特徴が目立つ。

T T の依頼会話の特徴は、「苦境の説明」を行う際に自分が追い詰められていることを「很煩惱、很痛苦（悩んでいる、苦しんでいる）、受不了了（耐えられない）」のような内面の心情を表す言葉に託し、相手に強く主張しながら、相手の「断わりの理由」に対しても積極的に質問をして情報を聞き出そうとしていることである。J J に比べると、「配慮発話」の使用は少ないものの、「見返りの言及」、「将来の接触への言及」が多い。会話の全体的な特徴を総合的にみれば、T T は相手への配慮が決してないわけではないことが分かる。日台間では、自分の苦境をどこまで言って相手に訴えかけ、どの程度の強さで相手に働きかけるかについては異なっていることが分かった。

それから相手との親密な関係に言及するかしないか、それをどのように表現するか、また、どのような補償的なストラテジーを用いるかについても、日台間で相違が見られた。台湾の場合は、「冗談」でリラックスした雰囲気を作りながら、相手との親密な関係を言葉で具体的に表現している。お互いの友情を確認しながら依頼をし、最後に今後も積極的にお互いに助け合い、友好関係を保っていくことに言及し、別れるという特徴が見られた。台湾人社会では頼む相手が親友なら、はっきり自分の苦境を強調することも、相手に積極的に質問をすることなども相手との友好関係に悪影響を与えることが少なく、日本社会に比べると、依頼の働きかけの強さの許容範囲が広い可能性がある。

#### 4.日台接触場面における上級台湾人日本語学習者の特徴

- 1) 【先行部】では「相手の状況」の使用が少ない。一方、「苦境の説明」の使用が3場面で一番多い。「苦境の説明」を行うときに、承諾してもらえないと大変なことになることまで言及し、相手に強く訴えかける。
- 2) 【先行部】と【依頼部】における「配慮発話」の使用が3場面で一番少ない。一方、「友情の確認」のような補助成分の使用が多い。
- 3) 相手に名前または綽名で呼びかけることが多い。
- 4) 「～てくれない/～てもらえない」のような疑問文形式の依頼表現を選択することが一番多い。
- 5) 「意味公式」に「言い切り」の文末が多く、「だよ」のような文末も使用されている。
- 6) 【再依頼部】では、相手の断りに対しての「受け止め」が少ない。8割近くの人が「了解」の「受け止め」を使用している。
- 7) 【再依頼部】では、「受け止め」がないまま{質問型}を再依頼の切り出しに使用する特徴が見られる。
- 8) 「相槌的発話」が少ない。
- 9) 「情報提供」の使用の割合が高い。
- 10) 接続表現や「言い差し」表現を用いて談話をスムーズに繋げていくことができない。
- 11) 【終結部】では伝えたい情報を一気に話し、相手に発話権を渡さずに一方的に会話を打ち切ることがある。

上記のうち、1)から8)はT Tの会話の特徴と似ている。5)から11)はTJLの談話管理上の問題点として指摘できる。

J Jの会話に比べると、T TとTJL Jの会話は、相手に名前呼びかけることをはじめ、「友情の確認」<sub>J</sub>、「冗談」<sub>J</sub>、「見返りの言及」や「将来の接触への言及」などのストラテジーを使用することが多い。これらのストラテジーは相手に対する親近感を示す点については共通している面をもっている。台湾の若者が依頼をする際には相手との親密な人間関係を言葉に表現する言語習慣があることが分かった。そして、難しい依頼でも相手が親友である場合、積極的に取り組む姿勢をとることと、今後もお互いに助け合っていき、友好関係を深めていくことについての言及が大事な補償のストラテジーとして用いられていることが明らかになった。

#### 教育への応用

本論文はJ JとT Tの両母語場面における依頼会話の全体を異文化語用論の視点から考察したうえで、TJL Jの会話を中間言語語用論および会話分析の視点から考察した。

依頼会話の【再依頼部】と【終結部】についての研究はほとんどなされていないため、本論は新たな試みであるといえよう。接触場面における学習者の問題を明らかにすることは会話教育のシラバスの作成の際の参考になり、学習者の会話管理能力の向上に繋げるこ

とが期待できる。

本論文で試みたような研究は、日本語学習者に日本語母語話者のコミュニケーションの特徴を示すと同時に、日本語母語話者に対しては接触場面でおきるコミュニケーション問題を提示することができる。このようにして双方向の認識が深まれば、接触場面の異文化コミュニケーションの際にお互いをよりよく理解し、お互いの違いをもっと許容し合い、誤解の少ない異文化交流が可能になっていくだろう。中間言語語用論や接触場面のコミュニケーション研究は日本語教育に役立つだけでなく、広く異言語文化間の相互理解を深めることにも貢献できるのである。